

## 擬音語・擬態語の漢字表記

天 沼 寧

本稿は、後に掲げる作家の作品から、漢字で書き表してある擬音語・擬態語等を抜き出し、前後の文を添えて、五十音順に配列したものである。

現在、擬音語・擬態語は、仮名書きにしてあることが多い。「国語問題要領」（昭和25.6.25、国語審議会報告。当時、一般に、「国語白書」と言っていた。）の「表記法」の第3項に、

かたかなは、これまで漢字をまじえて公用文・学術論文などに用いられていたが、現在では、主として外来語や外国の固有名詞を書きあらわす場合と、擬声語などの場合とに用いられる。

・・・

とある。

しかし、新聞等での実際を見ると、必ずしも片仮名書きで統一されているとは限らず、平仮名が用いてある場合もたくさんにある。

このことについて、詳しくは、拙著『擬音語・擬態語辞典』（東京堂出版刊）に述べておいたが、傾向としては、擬音語には片仮名を、擬態語には平仮名を用いてある場合が多いようである。

ところで、明治時代には、外国の地名・人名などを漢字書きにすることが多かったと同じく、擬音語・擬態語も、漢字書きが多く見られる。もっとも、語によっては、仮名書きだけのもの、仮名書き・漢字書きを交ぜ用いているものもあり、その数はかなりの数に上る。また、人によっては、ほんの幾つかの限られた語を除いては、仮名書きを原則としているものもある。（これは、本稿の対象としなかった。）

これら作品に見られる漢字書きの擬音語・擬態語に用いてある漢字には、単に、漢字の音・訓を当てた、いわゆる当て字書きのものと、擬音語・擬態語の意味に相当する意味の漢語を当てたものがある。前者は、漢字の字義には関係のないもので、外国の地名・人名の漢字書きと同様な行き方である。後者は、漢語としての読みと、擬音語・擬態語の語音とは全く無関係であるから、振り仮名がなければ、その読み方は読者には分からないことが多い。これらの多くのものは、漢語として字音で読めば、その意味は分かるのであるが、どういうものか、一般には、日常、まず目に触れることのないような難しい漢字が使っているものが多く、振り仮名がなければ、その読みも意味も分からないものが多い。これらの難しい漢字には、諸橋轍次氏の『大漢和辞典』以外の漢和辞典には採録されていないようなものがたくさんにある。

本稿を草するに当たって、使用した作品は甚だ少なく、したがって、擬音語・擬態語の漢字書きの実態を見るには、極めて不十分なものではあるが、時間と紙幅の都合もあるので、今回はこの程度にとどめておいた。

対象とした作品は、次のとおりである。（順序不同。）

- 1 尾崎紅葉……多情多恨 「㊤」と略記。

〔岩波文庫版『多情多恨』、昭和14.9.15、刊〕

- 2 二葉亭四迷……浮雲・小按摩・はきちがへ・其面影・出産・平凡

〔岩波書店『二葉亭四迷全集 第一巻』所収、昭和12.10.15、刊〕「㊤」と略記。

あひゞき・奇遇・片恋・肖像画

〔岩波書店『二葉亭四迷全集 第二巻』所収、昭和12.12.5,刊〕「㊟」と略記。

- 3 永井荷風……おぼろ夜・烟鬼・花籠・かたわれ月・濁りそめ・三重襷・薄衣・夕せみ・を  
さめ髪・うら庭・闇の夜・花ちる夜・四畳半・青簾・小夜千鳥・山谷菅垣・桜の水・新  
梅ごよみ・いちごの実・野心

〔岩波書店『永井荷風全集 第一巻』所収、昭和38.7.12,刊〕「㊤」と略記。

それぞれの擬音語・擬態語を見出し語とし、それを、現代かなづかい（ただし、長音符号「ー」を用いた。）、片仮名で掲げ、五十音順に配列した。各語について、必要最小限度の文脈を添えて実際の用例を示したが、同じ表記のものは作家・作品にかかわりなく、そのうちの一つを掲げた。したがって、これが、その代表例と考えるものではない。同じ語に対して、異なる表記のあるものは、その異なるものすべについて、やはり、1例ずつ掲げてある。

出典は、前述のように、尾崎紅葉の作品を「㊤」、二葉亭四迷の各作品を「㊟」、永井荷風の各作品を「㊦」の略号で示し、そのあとに、括弧に包んで、それぞれの本のページ数を示しておいた。「㊟」については、その「第一巻」所収のものは、（1-ページ数）と、第二巻所収のものは、（2-ページ数）のようにしてある。なお、「㊟」と「㊦」の場合は、略号のあとに、作品名を示した。

原文は、すべて縦組みであるが、本稿では横組みとした。ただし、読点は原文どおり「、」を用いた。漢字・仮名の字体は、すべて現行通用のものをを用いた。振り仮名は、本稿では、対象とする擬音語・擬態語には、すべて原文どおりに付けておいた。なお、他の部分については、極めて読み難いと思われるものに限って、原文どおりに付けておいたが、他の大部分は、印刷の都合上、省略した。もっとも、二葉亭の諸作品は、いわゆる総ルビであるが、他は、原文でもパラルビであって、すべての漢字に振り仮名が付けてあるわけではない。

なお、これらの作品にあらわれる擬音語・擬態語は、引用した文の中でも、見出しの語以外のものに、ときどき見ることができるよう、すべて漢字書きであるとは限らない。仮名書きのものは、そのすべてを採集したわけではないので、何ともいえないが、数から言えば、仮名書きのほうが、数は多いのではないかと思われる。また、漢字書き・仮名書きの両者が用いられているものもあり、本文に掲げた漢字書きの語が、常に漢字書きで用いられているとは限らないのである。

次に、3作家の本稿で取り扱った諸作品の一部について、仮名書きになっているものの例を、文脈を添えずに五十音順に掲げておく。片仮名・平仮名の交ぜ書き、圏点・繰り返し符号の使用等は原文のとおりである。

あんごり	イサクサ	うか	うつら	うと	うよ	ぞよ
うろ	ウンザリ	えツちら	おツちら	おづ	おど	がさ
がたりみしり	がや	からり	ガラリ	キツ	キツパリ	きやツ
きよーろ		ぎよツ	きよと	きよろ	きら	きり
くう	くす	ぐたり	グツ	ぐツ	くづ	ぐつすり
ぐつたり	ぐづり	ぐびり	くよ	ぐるり	グニヤリ	げた
こくり	ごし	ごそ	こツそり	こツてり	ごつとり	ゴトリ
ごとり	ごろり	さつ	さら	さらり	さわ	ざわ
じうツ	ジツ	しツかり	シツクリ	じツくり	しやなら	しよぼ
ジロリ	じろり	ジロリ	しんねりむつり		すご	すつ
すつ	スツク	すツばり	スボン	すらり	せい	ソコ



ソツ	ソハ〜	そは〜	そよ〜	だらり	たら〜	ヂツ
ちやきり〜	ちよツくり	ちらくら	ちら〜	ちらほら	ちん	ツイ
つい	つか〜	てら〜	ドシ〜	ドツ	どつか	どつかり
どや〜	どんより	ヌツ	ぬつ	のそり〜	のツつそツつ	のべんくらり
ハタ	ばた〜	ばた〜	ばたり	バタン	ばちり	パチン
ハツ	はツ	ばつ	はら〜	ばら〜	びしよ〜	びちや〜
びツたり	ヒヨツ	ひよろ〜	ひよろ〜	ふ	ふツ	ふつさり
ふツつり	ふは〜	へこ〜	べツたり	ボーン	ぼかん	ぼく〜
ほつ	ポツチリ	ほム	ほムム	ほろ〜	ほんがり	まじ〜
まじり〜	ムンヤクンヤ	ムツ	むづ〜	ムラ〜	モヤクヤ	もや〜
やき〜						

これらのうち、五十数語は、漢字書きにしてある場合もある。

以下、本論に入り、漢字書きの擬音語・擬態語を語別に、文脈を添えて掲げる。

#### アタフタ

- 「よろしい、汽車の綱曳！」と忙々<sup>あたふた</sup>出て行つたが、㊦ (207)
- 纔に一目見遣つたばかりで、周章と玄関へ出れば、㊦ (286)
- 小僧らしき十五六の少年は慌忙<sup>あたふた</sup>馳来たツて、㊦「烟鬼」(23)

#### アッサリ

- 鳩羽鼠地の淡泊とした更紗縮緬の長襦袢、㊦ (287)
- 顧みて東方の半天を眺むれば、淡々<sup>あつさり</sup>とあがつた水色、㊦「浮雲」(1-34)

#### アヤフヤ

- 決して那樣<sup>あやふや</sup>理ぢやないとか何とか曖昧なことを言つて、㊦ (127)

#### イソイソ

- 平生は余り色を動さぬお種も今日は楽みさうに嬉々<sup>いそいそ</sup>として、㊦ (261)
- …是非お前にと云ふ声掛りで、欣然として吾妻楼を出たのは、㊦「新梅ごよみ」(373)
- 車夫を勞つて還し、今迄泣いてゐたに似ず、怡々<sup>いそいそ</sup>と… ㊦「其面影」(1-496)

#### イライラ

- 「気を鎮めるやうになさいまし、然う苛々<sup>いらいら</sup>なさるから… ㊦ (306)
- 「…、単物だつて碌に縫へやしませんよ……」と焦燥する。㊦「其面影」(1-320)

#### イラクラ

- …苦しいと思ふ程思ひ乱れて焦燥<sup>いらくら</sup>した、その女である、㊦「奇遇」(2-71)
- 動もすれば、修羅を炎して焦心<sup>いらくら</sup>するやうなものゝ、㊦「片恋」(2-123)

#### ウカ

- 余り葉山の真面目さに婢も不覚<sup>うか</sup>と釣込まれて、㊦ (205)
- 柳之助は漫然と入りはしたのものゝ、其寐姿を見ると与<sup>とも</sup>に、㊦ (300)

#### ウカウカ

- 心配もなく、気あつかひも無く、浮々<sup>うか</sup>として面白さうに… ㊦「浮雲」(1-236)

#### ウジウジ

- 襟を見たり、裾を見たり、力の有らむ限<sup>うじ</sup>忸怩してゐると、㊦ (152)

- 「もツと此方へお寄り」、といつても、逡巡してゐるので、㊦ 「其面影」 (1-370)
- ウズウズ
- 如何か早く始末を付けたい、と実は勃々してゐるので。㊦ (97)
- ウツウツ
- …鴉片茶屋へ這入らんぢや、懔然と眠てばかり居たんだが、㊦ 「烟鬼」 (22)
- ウツカリ
- 「誰か今日来るか。」と偶然元に訊ねる、と訊ねられた方が…㊦ (89)
- それに一昨日私も漫然話はしたけれど、未だ百個日経たないのだね。㊦ (145)
- お勢は此危い境を放心して渡つてゐて何時眼が覚めようとも見えん。㊦ 「浮雲」 (1-238)
- ウツソリ
- 梧桐が高く大きな葉を重合はして、鬱然と繁つて居る向ふに、㊦ 「うら庭」 (187)
- 之を聞かせられたら何ぼ迂濶の夫でも、少しは憤慨しよう、㊦ 「其面影」 (1-334)
- ウツトリ
- 柳之助は…多くは物を思ふやうな態で、惘然としてゐる。㊦ (10)
- 妾は恰も酒の香にでも微く酔されたかの様に、唯陶然として了ひ、㊦ 「うら庭」 (188)
- 徳造は…肱を突いて、頬杖を為ながら恍惚とした眼付で、㊦ 「小夜千鳥」 (285)
- 思はず懔然と見惚れて居る中、㊦ 「新梅ごよみ」 (397)
- 月の恍した光も漏れて、㊦ 「奇遇」 (2-23)
- ウツラウツラ
- 病衰けた顔をして忪々としてゐるので、老婢は一方ならず心配した。㊦ (69)
- つい横になつたと思ふと、昏々と噫耐らぬと思ふと、㊦ (265)
- つくへ思ひに沈んで鬱々としてゐるが、遂に全く…㊦ 「肖像画」 (2-253)
- ウトウト
- 一しきり吸立てるが、直に又他愛なく昏々となつて、㊦ 「平凡」 (556)
- ウネウネ
- 鹿子斑の山が起伏と続く。㊦ (57)
- ウロウロ
- 「危ねい！ 往来の真中を彷徨してやがつて……」と…㊦ 「平凡」 (1-578)
- 小夜子は一寸狼狽したが、併し考へて見ると、何も証拠が…㊦ 「其面影」 (1-380)
- が、其お隣の反比例から又亡羊し出して、按分比例で…㊦ 「平凡」 (1-581)
- ウンザリ
- 何の学科も、皆味も卒氣もない聾聒する物ばかりだつたが、㊦ 「平凡」 (1-581)
- オギヤー
- 帰つて見ると、成程まだ生れぬと見えて呱呱という声はせぬが、㊦ 「出産」 (1-524)
- オズオズ
- …少女は密と其手を外して、怖々接吻する。㊦ 「あひゞき」 (2-13)
- オドオド
- 勘ちやんが側へ来ると、最う私は恟々して、㊦ 「平凡」 (1-544)
- ——男が傍へ来て立止つてから、漸く悸々した拜むやうな眼付で…㊦ 「あひゞき」 (2-7)
- オロオロ

- 「えッ。何云ふだね。」と、お時婆は惶々声になつた。 ㊦「小夜千鳥」(280)
- ガサガサ
- 庭の軒端と風が何かに触るのであらうけれど、人などが忍んで… ㊦(159)
- ガタビン
- 襖障子に当り散らして我他彼此させながら一人で床を運んで来て、 ㊦「其面影」(1-438)
- カッカッ
- 唯頭が割れさうに赫々として、苦しさは言ふばかりもなく、 ㊦「其面影」(1-496)
- ガッカリ
- 時々其処らの草むしり迄やらされて萎靡する事もある。 ㊦「平凡」(1-609)
- カッキリ
- 一杯に射入る日影に座敷は輝くやうで、割然と隅々も際立つて、 ㊦(89)
- ガヤガヤ
- あ、痛たッ、何でい、わーい、といふ声が譟然と入違つて、 ㊦「平凡」(1-566)
- ガラガラ
- その噂をしてみると、檻々と玄関へ横付にした車がある。 ㊦(243)
- …二十分も経つたかと思ふ頃、轟々といふ俵の音が… ㊦「其面影」(1-496)
- カラッ
- 其を見てゐる中に、眼界が忽ち豁然と明くなつて、 ㊦「平凡」(1-589)
- カラリ
- 柳之助は例のステッキを揮つて又一つ吃はせると、見事に外されて、発止と大地を撲たされる、曼然と落して… ㊦(162)
- 始終陰々として一種の気の曇つてゐたのか、廓然と晴れて、 ㊦(90)
- 此処は四辺が豁然としてゐるので、哲也の目にも直ぐと分つて、 ㊦「其面影」(1-366)
- ガラリ
- 風呂屋の格子戸を曼然と開けて、今磨き立ての顔美しく、 ㊦「おぼろ夜」(3)
- 怨霊のお鳥の様子は脱然と變つて、是ならば傍に居られても… ㊦(101)
- お玉は翻然と様子を変へて、昂然と外方を向いて了つた。 ㊦「小夜千鳥」(287)
- キチキチ
- 地虫の鳴くやうにランプはぢいゝ、時計は軋々、或は遠くに或は近くに、 ㊦(160)
- キチン
- 端然と坐つて、煙草は嫌ひ、茶は嚙まずで、 ㊦(44)
- 毎も神々しく髪を結つて、服裝を整然として、一寸座るにも… ㊦(168)
- …清潔に秩然と片附けて立派な僕を二人まで召使つて、 ㊦「肖像画」(2-217)
- キッ
- はたゝと椽側の隅に物音がするので、屹と頭を挙げて聞澄せば、 ㊦(295)
- 鋭い目容で屹と妹の顔を見詰めた。 ㊦「薄衣」(110)
- アーシャはふつと面を挙げて、真顔になつて怙と私の面を凝視て、 ㊦「片恋」(2-106)
- 「ですが」、と哲也は例になく毅然となつて「それは…」 ㊦「其面影」(1-346)
- が忽ちはッと氣を取直はして、儼然と容を改めて、震声で、 ㊦「浮雲」(1-184)
- キッパリ



- 私や甚麼<sup>どう</sup>してもお前の様に断然<sup>きつぱり</sup>思切<sup>きつぱり</sup>る事が出来ないんだもの……。㊦「四疊半」(254)
- 百々<sup>いっぺん</sup>説いたが、生返事ばかりで、柳之助は決然<sup>きつぱり</sup>諾とは言はなかつた。㊦(59)
- お前は甚麼<sup>どう</sup>しても、屹張<sup>きつぱ</sup>り三二郎様の事は諦めて了はなければ…。㊦「新梅ごよみ」(399)
- 「無いさ。事業の成功する迄は求めて係累は作らない。」と簗島は屹張<sup>きつぱり</sup>云つたが、「時に君の方は？」㊦「野心」(442)

キャンキャン

- …、疑もなくこゝろ小犬の啼き声だ。時々咽喉でも締られるやうに、消魂けふたましくきん嘔々と啼き立てる其声尻が、 ⑦「平凡」(1-554)

半一 半一

- 君が何時迄も人並の生活が出来ないで窮々<sup>きゆうきゆう</sup>云つてるのを見ると、 ⑦「其面影」(1-355)

## ギョツ

- 夢心地に男が一人身近に坐つてゐるので、慄然<sup>ぎよつと</sup>して正気付く途端に、 ㊦ (301)
- 「情人の所さ。」/「情人?！」と稍愕然<sup>ぎよつと</sup>とした牀で、 ㊦ (171)
- 「ぢや、手込にでも?……」と哲也は惴然<sup>ぎよつと</sup>とすると、 ㊦ 「其面影」(1-338)
- ト聞くと等しく文三は駭然<sup>きやうぜん</sup>としてお勢の顔<sup>おもてめ</sup>を目守る。 ㊦ 「浮雲」(1-24)

キ ャ ト キ ャ ト

- 容体に<sup>か</sup>凭うと<sup>こはらし</sup>変つた所は無いが、唯眼色が<sup>きよと〜</sup>可<sup>こはらし</sup>恐<sup>きよと〜</sup>くなつて瞿々してゐた。 ㊦ (150)

## キラキラ

- 彼の面は今怖い程真青になり、只眼ばかり<sup>きら〜ひか</sup>爛々輝つて居るので、㊦「野心」(475)
- 月はおそろしく皎かで、惶々する大粒な星が青黒い空に… ㊧「奇遇」(2-26)
- また月影が河面に横はつて<sup>きら</sup>燦々<sup>きら</sup>と見え出す。㊨「片恋」(2-90)
- 根方から木末まで同じ樺色に染りながら、<sup>きら</sup>燦然として風に騒ぐ… ㊩「あひゞき」(2-4)
- …金包の、ざら〜と囊を覆れ出る所が眼前にちらつく。包が解けて、金色が<sup>きら</sup>燦爛として、  
㊪「肖像画」(2-194)

キラキラ

- 道の氷は硝子を踏毀したやうに、兩側の屋根の霜は的<sup>どろ</sup>々<sup>どろ</sup>と輝いて、 ㊤ (69)
- ㊦ 四<sup>あたり</sup>辺は天も地も一体に燦爛と光り輝いて、空気までが鮮に見える。 ㊦ 「片恋」 (2-129)

## キラリ

- と振向く拍子に<sup>きらり</sup>炳然と眼鏡が鋭しく光る。 (オ) (95)

キリッ

- 後の車は、円髻に結つた、四十五六の<sup>きりッ</sup>氣凜とした、口喧しさうな、 ㊦ (75)

キリリ

- 男は年頃二十五六、瘦立ちの色の白い凛<sup>きりう</sup>平とした見憎くからぬ… ㊦ 「闇の夜」(194)

## グイ

- 急来る涙を防がう為に、余れる酒を又一息に呷と飲むで、 ㊦ (9)
- 柳之助は行くよりランプを乞と明くして、坐ると写真を… ㊦ (237)
- 女は島渡身軀を斜に向直して、其儘頓と袖を引くと、ゆらゆらと… ㊦ 「小夜千鳥」(278)

クサクサ

- 那麼にやい／＼言はれるのも迷惑だとか、傍にばかり居られるので鬱々するとか、㊦ (43)  
○ 「もう、此様な話は止さう！ 鬱屈する。それよりか飯を喰ひに…」㊧「其面影」(1-423)

クジャクジャ

- と翁飴を口に入れて、不味さうに咀嚼始める。 ㊦ (56)

クスクス

- 其処に座るか座らぬかに、葉山は吃々笑ひながら、 ㊦ (64)

グズグズ

- 行懸りで愚図々々はしてみられなくなつたから、始めて… ㊦ 「平凡」(1-652)
- 私が此処へ来て居る為、何か家で愚図〔注：振り仮名なし〕云ふ様な事なら、 ㊦ 「花ちる夜」(213)
- 少し文三の出やうが遅ければ、何を愚頭々々してゐると云はぬばかりに、此方を睨めつけ、  
㊦ 「浮雲」(1-234)
- 最初に断然辞つて了へば好いの、逡巡して居たもんだから、 ㊦ 「其面影」(1-311)
- 九時頃まで炬燵に入つて、遅々と竦むでゐたのである。 ㊦ (67)
- 此で暗々言つて居ずと、先方へ行つて悔つて来るのが早手廻だ。 ㊦ (191)
- お前は其儘曖昧に彼地に居附いて了つた方が好いではないかと、 ㊦ 「其面影」(2-388)

クスリクスリ

- 迹に葉山は吃々笑ひながら、 ㊦ (36)

グタリ

- 慙う云つて、思入れのあると云ふ風で、萎靡と首を垂れて、 ㊦ 「小夜千鳥」(276)
- 「…僕あね、今貴女に行つて了はれると、実に弱るんだ」と頹然となつたが、 ㊦ 「其面影」  
(1-405)

グッ

- 柳之助は呷と塞つて、 ㊦ (172)
- …我前に陳んだ杯の一つを取上げるより、呷と乾して、 ㊦ 「其面影」(1-303)

クッキリ

- 色は白し、薄化粧さへしてゐるので、何処と無く劃然と水際立つて、 ㊦ (260)

グツグツ

- 鯛の菽羹乳を沸々いはせながら、 ㊦ (171)

グタリ

- と張合が抜けて、そのまゝ萎靡と仆れて了ふ。 ㊦ (68)

クドクド

- 簪を繞る玉水の貧しげな響は妮々と呟く如く聞ゆる。 ㊦ (294)
- 昇は忽ち平身低頭、何事かを咄々と言ひながら続けさまに… ㊦ 「浮雲」(1-94)
- 何か諄々と教誨せてゐたが、 ㊦ 「浮雲」(1-213)

グビグビ

- …壺を引寄せて、栓を抜くと直に口を当支つて、呷々と喇叭で飲んで、 ㊦ (296)

クヨクヨ

- 「御新造様、真箇に快々なさらないが能御坐んすよ。…」 ㊦ 「薄衣」(78)
- 父は益々憂鬱になつて、陰気になつて、意気地がないと思ふほど懊惱する。 ㊦ 「片恋」  
(2-115)

グラグラ

- 「然うどうも何時迄も動揺して心が極らんぢや、本当に頼もしくない。 ㊦ 「其面影」(1-470)

クリクリ

- 肝々した目をいと々円くして、 ㊤ (177)

クルリ

- 「知らない！」 と姫松は一転と背後を向けて、 ㊤ (210)
- 云ひ様、宛転と後を向いたと思ふと、頬冠を為て、 ㊦ 「小夜千鳥」 (289)

ケバケバ

- 濁黒い顔に眉と髭の歴々と濃い、 ㊤ (72)

コソコソ

- 二人で密々内所話しちや相談を極めといて、私達は後廻しさ。 ㊦ 「其面影」 (1-302)
- 窃と目立たぬやうに後方に退つて、狐鼠々と奥へ引込んだ。 ㊦ 「平凡」 (1-575)

ゴタゴタ

- 此処で又紛々として入乱れ重なり合つて、 ㊦ 「平凡」 (1-565)
- 雪江さんが相手の女主人公で、紛々した挙句に幾度となく… ㊦ 「平凡」 (1-644)
- 車夫は雑然と火鉢に聚つて酒を飲んでゐる。 ㊤ (203)
- 其晩はお通夜で、翌日は葬式と、何だか家内が混雑するのに、 ㊦ 「平凡」 (1-547)

ゴッタ

- さて絵は…取散らしてあつて、道具類や書物と混淆になつてゐたが、 ㊦ 「肖像画」 (2-231)

ゴチャゴチャ

- 低い纖弱い声が紛々と絡み合つて、何やら切りに慌しく… ㊦ 「平凡」 (1-549)
- 何でも赤い模様や黄ろい形が雑然と附いた華美な襦袢の袖口から、 ㊦ 「平凡」 (1-629)

コヂンマリ

- 裏猿楽町のとある路地口の、小締とした格子戸造に、夫婦二人… ㊤ 「闇の夜」 (200)

コソコソ

- これがワシリエフスキ島の汚ない借家で兀々勉つてゐた見る影もない美術家であつたとは、 ㊦ 「肖像画」 (2-217)
- 柳之助は引続いて出勤を怠らず、朝々例のステツキを擧げて蹢躅と出て行つては、蹢躅と帰つて来る。 ㊤ (133)

コソソリ

- 「ない？ 人の目を抜いて、窃り外で出会つて置きながら、 ㊦ 「其面影」 (1-384)
- 二人はまた面を看合はせて密り笑つた。 ㊦ 「其面影」 (1-307)

ゴロゴロ

- 這麼やつて家に転々として居るよりか、 ㊤ 「小夜千鳥」 (297)
- 遠雷のやうに轟々と響いて… ㊦ 「肖像画」 (2-235)

コンモリ

- 種々の庭樹も鬱然と茂つて… ㊤ 「新梅ごよみ」 (331)
- …極く樹深い鬱鬱とした森で… ㊦ 「奇遇」 (2-42)

サッ

- 颯と吹添うた風に一際滋く桜の花が往来の方へ… ㊤ 「花ちる夜」 (245)
- 隠居も颯と面色を変へて、 ㊦ 「其面影」 (1-346)

ザッ



- 又もやごろ〜と響いて、同時に沛然と、盆を覆した様な大夕立。 ㊦「小夜千鳥」(298)

サッサ

- 「用は無え筈だから、早々と帰んなせえツたら。」 ㊦「新梅ごよみ」(333)  
 ○ うんともすんとも言はず、葉山は匆々と歩くばかり。 ㊦(202)  
 ○ 「…。早速と帰んなさい。」 ㊦「烟鬼」(24)

サッパリ

- まだ如何も加減が爽快しないのに、 ㊦(102)  
 ○ 此男もその類で、桃色で、爽然した、人を人臭いと思はぬやうな… ㊦「あひゞき」(2-7)  
 ○ 寧ろ潔りと仰有つて下さいな。 ㊦「其面影」(1-437)  
 ○ 清楚した風で、木の影に坐つてゐる所か何かで、 ㊦「肖像画」(2-208)  
 ○ 而して葉山君は淡泊しとつて好い… ㊦(290)  
 ○ 「…寧ろ決然と離縁して…。」 ㊦「其面影」(1-499)  
 ○ 「…、もう全然御快しうみらつしやいますか。」 ㊦(78)  
 ○ 「…。それぢや薩張分らねえや…」 ㊦「其面影」(1-308)

サバサバ

- 空はからりと晴れて、空気は爽然とした一種の涼味を含んで…、 ㊦「あひゞき」(2-5)

サラリ

- 為る事がネチ〜ばかりして、洒然と行かぬや。 ㊦「其面影」(1-356)

ザワザワ

- 草花立樹の風に揉まれる音の颯々とするにつれて、 ㊦「浮雲」(1-28)

シオシオ

- 柳之助は悄々と頷いた。 ㊦(11)  
 ○ 失望して、自分は悄然もと来た方へ… ㊦「いちごの実」(426)  
 ○ 忽ち火の消えたやうに萎々と、 ㊦(330)  
 ○ それが帰つて来ると憔悴として、門に入るも脚の重いやう、 ㊦(238)

シカ

- 葉山は起たうとする、其袖を柳之助は緊と捉へた。 ㊦(21)  
 ○ 「…、私もまだ確と決心した訳ぢやないのだから」、 ㊦「其面影」(1-365)

ジッ

- ト引手繰つて、昵と視る。 ㊦(47)  
 ○ …口惜涙を、主人夫婦に見せまじと熟と堪へて、 ㊦「三重襷」(68)  
 ○ 葉村は瞥と其様子を後目に掛けて、 ㊦「其面影」(1-515)  
 ○ …柳之助は身動きもせず沈としてゐた。 ㊦(237)  
 ○ 驚いて凝と又お顔を見詰めた。 ㊦「四畳半」(257)  
 ○ 忌はしさに目を瞑つて凝然として居ると、 ㊦(160)  
 ○ 妙に気が立つて静止としてはゐられぬやうな心地がする。 ㊦「奇遇」(2-40)

シッカリ

- もう少し緊り握つてゐたら、 ㊦「肖像画」(2-193)  
 ○ 男といふものは、もつと屹然としてもらひたかつた。 ㊦(224)  
 ○ 「所天、確然なすツて下さい、…」 ㊦「烟鬼」(26)

- 「…よく探つて見て、確乎とやらねば成らない所だぜ。」 ㊦「野心」(447)
- 毅然してゐて、正直で、幾分か強情な所もあつて、肌合の荒い、 ㊦「肖像画」(2-244)
- 今から最う何だか絵の具が大層目立つ気味がある、筆が、<sup>しつかり</sup>適勁しない、 ㊦「肖像画」(2-183)

#### シツクリ

- 頻に指環を動かして見たが、勝手が悪いので、<sup>あちこち</sup>彼地此地と持更へてゐる間に<sup>うち いつかしつくり</sup>不知四合と小腋に抱いて了つた。 ㊦(292)

#### シットリ

- 談話は四辺の空気の如くに、<sup>や</sup>穏な<sup>しつとり</sup>蕭然した調子で、なか／＼断えません。 ㊦「片恋」(2-88)
- 若いからと云つて、意気が壮んであるでななく、唯<sup>しつとり</sup>温雅としてゐるばかりである。 ㊦「片恋」(2-99)

#### シトシト

- 又<sup>しと／＼</sup>蕭索と降籠めた新道から、 ㊦「おぼろ夜」(3)
- …<sup>しと／＼</sup>蕭々と降出した春雨に、 ㊦「新梅ごよみ」(384)

#### ジメジメ

- 然しては降るでもなしに<sup>じめ／＼</sup>津湿と、 ㊦(309)

#### シャン

- と両手を膝に<sup>しやん</sup>端然と其処に坐る。 ㊦(52)

#### シューッシューッ

- …<sup>わづか</sup>纔ばかり白波が起つて、<sup>しうッ／＼</sup>淙々といふ音が微にする。 ㊦「片恋」(2-81)

#### ションボリ

- <sup>しよんぼり</sup>愁然と俯いて、どうやら身に浸みる気色。 ㊦(84)
- <sup>しよんぼり</sup>悄然と胴の間に腰をかけた後から、 ㊦「小谷菅垣」(314)

#### ジリジリ

- 折々柳之助の声が能く聞える、其度にお島は<sup>じり／＼</sup>憤悶する。 ㊦(129)

#### ジロリ

- 小夜子は<sup>じろり</sup>瞥と其様子を見て、 ㊦「其面影」(1-423)

#### シン

- 森としてゐる四辺の<sup>しん</sup>閑寂を、 ㊦(105)
- 裏庭は再び<sup>しん</sup>寂として了つた。 ㊦「うら庭」(189)
- 四辺は<sup>しん</sup>微暗く寂然としてゐる中で、 ㊦「平凡」(1-552)

#### シンミリ

- 哲也も<sup>しんみ</sup>沁りとなつて、友の説に耳を傾けてゐたが、 ㊦「其面影」(1-356)

#### シンメリ

- …<sup>しんめり</sup>菩提樹が蕭々と青光に光る月の光を受けて薄青く見え、 ㊦「奇遇」(2-24)

#### ズイ

- …目前へ、柳之助が<sup>づい</sup>衝と顛れたので、 ㊦(177)

#### スゴスゴ

- 柳之助は<sup>すご／＼</sup>悄々座に復つたが、 ㊦(180)
- と小夜子は逆らはず、紙幣一枚受取つて、<sup>すご／＼</sup>悄然起つて出て行つたが、 ㊦「其面影」(1-451)

#### スタスタ

- 其儘<sup>すた</sup>寝々向ふの街道の方へと歩いて行ッ了<sup>ちま</sup>つた。 ㊦「小夜千鳥」(289)
- 「あ、お帽子も冠<sup>すた</sup>らずに蹣跚<sup>すた</sup>行らつしやいました。」 ㊦ (67)
- ズッ
- お喚<sup>よ</sup>び申したのぢや、さあ、直<sup>ずつ</sup>と此方へと仰有る。 ㊦「其面影」(1-340)
- スッカリ
- 「…、今迄の事は全然<sup>すつかり</sup>……水に……」 ㊦「浮雲」(1-184)
- スラリ
- 美人ではないが、目鼻立の揃<sup>せい</sup>つた、色白<sup>せいはく</sup>の身材<sup>せいたい</sup>の纖削<sup>せんせつ</sup>とした、閑雅な、 ㊦ (31)
- 洗髪を後に垂<sup>すらり</sup>らして瘦立<sup>すらり</sup>の娉婷<sup>しやうてい</sup>とした身軀を、 ㊦「小夜千鳥」(275)
- ズングリムックリ
- 豊々<sup>ぶんぶん</sup>腹々<sup>むくむく</sup>した十七ばかりの傳<sup>もり</sup>が、 ㊦ (66)
- ズンズン
- 「…、此方<sup>い</sup>で善と思つたら侃々<sup>かん</sup>然<sup>ぜん</sup>う為て了はなければ可けない。」 ㊦ (104)
- セーセー
- お島は在合ふ椅子に靠<sup>か</sup>れて奄々<sup>せん</sup>いつてゐれば、 ㊦ (89)
- セカセカ
- と言つたばかりで、焦躁<sup>せうそう</sup>しながら… ㊦ (12)
- 急々<sup>せいか</sup>と室の内を歩くやら、髪を掻<sup>か</sup>立てるやら、 ㊦「肖像画」(2-204)
- セッセ
- 母親が傍<sup>そば</sup>で精々<sup>せいせい</sup>と身支度<sup>みしど</sup>するのを棒立<sup>ぼうだて</sup>に立つて拝見<sup>はいけん</sup>してゐる。 ㊦ (89)
- 久振<sup>きうしん</sup>に針を持つて切々と裁縫<sup>さいほう</sup>を為てゐる。 ㊦「其面影」(1-375)
- セッセッ
- それから編棒<sup>へんぼう</sup>と毛糸<sup>けいし</sup>の球を持出して、暫くは黙<sup>もく</sup>つて切々と編物<sup>へんぶつ</sup>をしてゐる。 ㊦「平凡」(1-617)
- ゾーッ
- 「其時は実に僕は悚然<sup>そうぜん</sup>としたよ。…」 ㊦ (50)
- ゾクゾク
- 欣々<sup>きん</sup>しながら室の内を歩いてゐたが、魂<sup>たま</sup>は最<sup>も</sup>有頂天<sup>うてんてん</sup>に飛んでゐた。 ㊦「肖像画」(2-202)
- ゾクリゾクリ
- 襟元<sup>きんぐん</sup>から肅々<sup>そく</sup>と悪寒<sup>いさむ</sup>くなるのに、 ㊦ (8)
- ソコソコ
- 「今犬<sup>いぬ</sup>を撲失<sup>ぶくしつ</sup>つて、手を撲<sup>も</sup>つたです。」勿々<sup>もく</sup>にステッキを拾<sup>ひろ</sup>つて門を入りながら、 ㊦ (162)
- と面目<sup>めんもく</sup>を失つた婢<sup>めかけ</sup>は倉皇<sup>そうわう</sup>に逃げて行く。 ㊦ (46)
- ソソクサ
- 哲也<sup>てつや</sup>も帽子<sup>ぼうし</sup>を脱<sup>は</sup>て何か倉皇<sup>そうわう</sup>と一礼<sup>いちれい</sup>して、 ㊦「其面影」(1-490)
- ソッ
- 手早<sup>てはや</sup>く手巾<sup>ハンカチーフ</sup>を出して、窃<sup>そつ</sup>と拭いて、 ㊦ (91)
- …母親<sup>はは</sup>に密<sup>ひそ</sup>と抱<sup>か</sup>かせて、男の子でお手柄<sup>てうげ</sup>と…褒めそやす。 ㊦「出産」(1-527)
- 未だ帽子<sup>ぼうし</sup>を冠<sup>かぶ</sup>つたまゝであるので、お種<sup>おしゅ</sup>は背後<sup>せう</sup>から徐<sup>そ</sup>と取<sup>と</sup>つて… ㊦ (244)
- ガギンは軽<sup>かろ</sup>とアーシャの頭<sup>あたま</sup>を撫<sup>な</sup>でゝゐる。 ㊦「片恋」(2-108)



ゾッ

- 葉山は悚然として寒くなつた。 ㊤ (35)
- 慄然とするほど凄味がある。 ㊦「浮雲」(1-28)
- 「…その帳面と云ふのが、名を聞いてさへ凄然とするね。」 ㊤ (182)

ソックリ

- 「あ、あれは那娘の声に酷似だが……。」 ㊦「おぼろ夜」(13)

ソヨ

- 両側の屋根の霜は的々輝いて、習との風の有るでも無いに、 ㊤ (69)
- 夜露の空は殊更朗に、澄徹るばかりで、習々との風無ければ、 ㊤ (35)

ソロソロ

- 一番試して見やうと云ふ気で、漸次水を向ける。 ㊤ (42)
- 「…話方々最う徐々帰る事に…」 ㊦「花ちる夜」(216)
- 此頃叔母がお勢と文三との間を閑やうな容子が徐々見え出した一事で。 ㊦「浮雲」(1-172)

ゾロゾロ

- 義理一辺の見送人等は発つ人には背後を向けて陸續引上げる中で、 ㊦「其面影」(1-504)

ソロリソロリ

- 徐り〜と側へ寄つて入らつしやる。 ㊦「其面影」(1-343)

ゾロリ

- 織削に縮緬を着て披々とした横姿の媚かしさに、 ㊤ (287)

ソワソワ

- 持前の沈着を失つて、今宵は何やら倉皇と、通りすがりの…、 ㊦「其面影」(1-358)

タラタラ

- 泪は指の股に伝はつて滴々流れてゐる。 ㊦「片恋」(2-148)

チャホヤ

- 所が是がまた非常にアーシャを愛敬する。 ㊦「片恋」(2-99)

チャン

- 椽側に還つて来れば、お島が丁と其処に待つていて、 ㊤ (98)
- 歴と堅気の娘でお父様の傍に居る方が幾何心丈夫だか知れやしないよ。 ㊦「薄衣」(93)
- 旦那様のが那麼して歴然とお在なさるぢやございませんか。 ㊤ (150)
- 二間ほどの二階が借りてあつて、掃除も整然と出来て、 ㊤ (143)
- 「其が既に妾です。貴方は前から簪いで在れる、僕は瞭然と見とるです。…」 ㊤ (317)
- 髪を耳の間へ撫込むで、端然として窓に対つて、 ㊦「片恋」(2-103)
- 公然と一時は親も許しまして…、 ㊦「四畳半」(254)

チョイチョイ

- 今日にも限らぬ、実に此頃は往々と然でない為方が見える。 ㊤ (120)

チョッ

- お種は不憚な色をして瞥と夫を見ると、 ㊤ (40)

チラ

- 細密い松の葉の間に、千鳥の浴衣の長い袖が瞥と見えた。 ㊦「小夜千鳥」(284)

チラチラ

○ 真赤な夕炎<sup>ゆふぼえ</sup>の空は全く色褪めて、松の葉越に点々と薄い星の光が見初めた。㊦「小夜千鳥」(286)

○ …可愛らしく若復つた笑顔が、隠頭<sup>おかげ</sup>と目に見える。㊦(68)

チラリ

○ 行先に女の姿が瞥<sup>ちらり</sup>と見えたかと思ふと、㊦「片恋」(2-94)

チラリチラリ

○ 其蔭を隠頭<sup>ちらり</sup>忙しさに走る人影も見える。㊦(203)

チン

○ 遽に温雅<sup>しとやか</sup>になつて、殆ど別人のやうに端然<sup>ちんぜん</sup>としてゐる。㊦(101)

○ …露地の正面が秩然とした式台造で、㊦(203)

チンカカラリ

○ 階子<sup>はしご</sup>を乱次<sup>しどろ</sup>に駈下る響がして、その中で何を落したのか鏘然鏗然<sup>ちんかからり</sup>！——お島は眼鏡<sup>こは</sup>を破して了つたのである。㊦(131)

チンマリ

○ 其処には小机が据つて、飾つたやうに秩然<sup>ちんまり</sup>と其上が片附けてある。㊦(286)

ツ

○ 呷<sup>ぶつ</sup>と乾<sup>ほ</sup>して、面を掬<sup>かほ</sup>めながら衝<sup>しか</sup>と差すと、㊦「其面影」(1-303)

○ 三二郎の顔を覗きながら突と語を切つた。㊦「新梅ごよみ」(358)

ツイ

○ と衝<sup>つい</sup>と入つて、／「あゝ寒い、寒い。」㊦(14)

○ 礼吉は突と顔を擡<sup>あ</sup>げて叔父の顔を見たが、㊦「花ちる夜」(240)

ツイツイ

○ 限笹の所斑に生へた日陰に、長い霜柱<sup>ついで</sup>の藪々と立つてゐるのが頬に障つて、㊦(98)

ツカツカ

○ …柳之助は僕々と奥へ入つて来た。㊦(243)

ツツ

○ 女は藤作の語を聞くと共に突と顔を上げて見るや否や、㊦「新梅ごよみ」(340)

ツベコベ

○ 後から随て来て何やら喋々と饒舌<sup>しゃべ</sup>り立てる…、㊦「其面影」(1-386)

ツヤツヤ

○ 今髪結を返したと云ふ、潤沢<sup>つや</sup>と水の垂れさうな円鬘の首を…㊦(37)

ツン

○ お玉は翻然<sup>がらり</sup>と様子を変へて、昂然<sup>つん</sup>と外方を向いて了つた。㊦「小夜千鳥」(287)

ツンツン

○ 「…、何だか憤つて居らしつたやうで、お帰なさる時も、怫然<sup>つん</sup>して…」㊦「片恋」(2-125)

ドウ

○ 夫の驚愕も非常で、瞠<sup>たう</sup>と其場に坐つて了つた。㊦「闇の夜」(201)

ドキドキ

○ 胸が悸悸<sup>どきどき</sup>する。㊦「肖像画」(2-190)〔注：原文では、「悸悸」は2行にわたっている。〕

ドキマギ

- ふと復た萎<sup>しを</sup>れて、蒼ざめて、狼<sup>どきまぎ</sup>狽<sup>だ</sup>して—— ㊦「あひまぎ」(2-7)
- お勢は周章<sup>どきまぎ</sup>狼<sup>だ</sup>狽<sup>だ</sup>してサツと顔<sup>あか</sup>を赧<sup>か</sup>らめ、㊦「浮雲」(1-105)

ドクドク

- 柳之助は済したもので壺<sup>どく</sup>を替<sup>へ</sup>て酌<sup>しやく</sup>をする。滾<sup>どく</sup>々と出る酒を見ながら… ㊦(22)

ドッ

- …一陣の風は颯<sup>どつ</sup>と梢<sup>しやう</sup>を鳴して、 ㊦(8)
- 机の前に座ると、今まで辛くも紛<sup>どつ</sup>らしてゐた思<sup>おも</sup>ひが一時に紛<sup>どつ</sup>と寄せて… ㊦(135)
- 哄<sup>どつ</sup>然と笑ひ声を揚げて其四五人は行過ぎて了つた。 ㊦「其面影」(1-362)

ドッカ

- 擡<sup>どつか</sup>乎と座敷の中央に座つて、 ㊦(90)

トツカワ

- 優しいお嬢様のお声が聞えたので、自分は為<sup>な</sup>掛けた用事も其儘<sup>とつかは</sup>に倉皇<sup>ふすま</sup>と紙門を開けて這入つたのである。 ㊦「四疊半」(251)

ドッキリ

- 衝<sup>どつきり</sup>跳したのは柳之助、お島は別条も無く聞いてゐる。 ㊦(102)
- お鈴が来て、／「奥さん、御隠居様が一寸。」／柳之助は惕<sup>どつきり</sup>息。 ㊦(318)

トックリ

- …仕事<sup>むか</sup>に対<sup>たい</sup>つたら篤<sup>とつくり</sup>と考へてお遣り、 ㊦「肖像画」(2-183)

ドヤドヤ

- 皆<sup>どや</sup>噎<sup>え</sup>々と立去りたり。 ㊦「咽鬼」(25)

トン

- 婢<sup>なんな</sup>が<sup>い</sup>ばた<sup>ゝ</sup>と駈<sup>は</sup>けて来て、余り機<sup>はぎ</sup>むで、とんと一つ紙門に抵<sup>ふすま</sup>つて、 ㊦(45)

トントン

- 犬は猶<sup>しきり</sup>連に吠<sup>い</sup>付くのを、逐<sup>とん</sup>ひながら又<sup>ゝ</sup>丁々。 ㊦(161)

ドンドン

- 「其が矢でした。軽い内に滔<sup>どん</sup>々薬を飲ましたら、 ㊦(179)

トントントン

- 徐に門の戸を<sup>とん</sup>々々。 ㊦(161)

ドンヨリ

- 勢も力もない充血した眼球<sup>どんよ</sup>が曇<sup>も</sup>りと濁つた光を含つて、 ㊦「其面影」(1-507)
- 味な厭らしい微笑を湛<sup>どんより</sup>へて、朦朧<sup>もろく</sup>した眼をすぼめてゐる。 ㊦「片恋」(2-150)

ナミナミ

- 看る<sup>なみ</sup>其杯に満々と注ぐ。 ㊦「其面影」(1-303)

ナヨナヨ

- 弱<sup>なよ</sup>々とした令嬢の様子を見れば、 ㊦「肖像画」(2-210)

ニコニコ

- 「さうでしたねえ」、と莞<sup>にこ</sup>爾となつて、 ㊦「其面影」(1-309)
- 「本当？」と雪江さんも急に莞<sup>にこ</sup>爾々々となつた。 ㊦「平凡」(1-597)
- 顔は見ぬでも、声を聞いたばかりで、微笑<sup>にこ</sup>してゐるのが知れる程である。 ㊦「片恋」(2-85)



ニッ

- …心から莞爾微笑にっとうほふみまれるなど、 ㊦「其面影」(1-391)

ニッコ

- 莞爾にっことなつた儘で、尚雪江さんの事を…、 ㊦「平凡」(1-619)

ニッコリ

- 柳之助は莞爾にっこりとも為ず、 ㊦ (191)  
○ トいつて何故ともなく莞然にっこりと笑ひ、 ㊦「浮雲」(1-28)  
○ 「…」と微笑する。 ㊦「平凡」(1-627)

ニョッポリ

- 唯蘊然にょつぱりと富士の白妙は四辺を払つて、 ㊦ (57)

ノコノコ

- 旦那殿が跼蹐のこゝ御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出来るよ、 ㊦ (34)  
○ 此御帳面に留められた奴が、其次に蹢躅のこゝ行かうものなら惨憺みじめ！ ㊦ (183)

ノソノソ

- 遅々のそゝと手拭で手を拭きながらお玉の前へ坐つた。 ㊦「小夜千鳥」(295)

ノビノビ

- 夫は外の勤から帰つて暢々のびとしてゐれば、 ㊦ (234)

ノンビリ

- まづ無事に暢びのんりと育つた。 ㊦「平凡」(1-561)

ハタ

- 今迄喧しい程甲地乙地をきこきに鳴騒いで居た蟬の声が礧はたと止んで、 ㊦「小夜千鳥」(298)

バタリ

- ゆらゆらと手答へもなく、而して礧然ばたりと倒れて、 ㊦「小夜千鳥」(278)

パッ

- …停車場の電気が燦然ぱつと華やかに見えたので、 ㊦「其面影」(1-392)  
○ 簞笥あを啓けると莽然ぱつと起つ麝香の香に、 ㊦ (151)

ハッキリ

- と其声は稍明瞭はつきりしたやうに聞えた。 ㊦「野心」(490)  
○ 細い局部は明亮はつきりするが、全体が成立たない。 ㊦「奇遇」(2-44)  
○ アーシャの明々はつきりした眼付を見ると、 ㊦「片恋」(2-127)  
○ 布地がまくれさうになつたのが瞭然はつきり見える、 ㊦「肖像画」(2-192)  
○ 判然はつきりは解らぬが、大方そんな様事であらう、 ㊦ (197)  
○ 目鼻立の発揮はつきりとして賑かな姉のお類より… ㊦ (75)

パッチリ

- 被つた顔も出さずには居られず、洞然ぱつちりと目を開いた。 ㊦ (296)  
○ 黒眼勝の眼の鈴を張つた様に炯然ぱつちりとした、 ㊦「小夜千鳥」(275)

ハラハラ

- 真に一時の御様子では、御病気にでもお成なさりはしまいか、と私は悚々はらいたして居りました。 ㊦ (189)  
○ 「隔てやせんよ、僕は。」／と柳之助は惴々はらしてゐる。 ㊦ (61)

- 「いゝえ、然うぢやないんですけど」、と清々<sup>はら</sup>と涙を零す。 ㊦ 「其面影」 (1-401)
- と俯むくと、涙が清々<sup>はら</sup>と膝へ零れて、 ㊦ 「其面影」 (1-377)
- バラバラ
- ぼり〜頭を搔くと、紛々<sup>ばら</sup>雲脂の飛ぶのが、 ㊦ (61)
- ピカピカ
- 其包を解くと、金貨が煌々<sup>びか</sup>とした。 ㊦ 「肖像画」 (2-190)
- ピカリ
- 金貨が煌<sup>びか</sup>り、ざら〜として、 ㊦ 「肖像画」 (2-190)
- ビク
- 成程と横手を拍<sup>うた</sup>れる予想が、なか〜蠢然<sup>びく</sup>とも為ぬのみか、 ㊦ (218)
- ビクビク
- 高が居留守を遣つたのぢやないか、それしきの事に憂懼<sup>びく</sup>するような事ぢや、 ㊦ (191)
- ヒシ
- 衝<sup>つ</sup>と側へ寄つたかと思ふと卒然<sup>いきなり</sup>犇<sup>ひし</sup>としがみ付いて、 ㊦ 「其面影」 (2-440)
- ヒシヒシ
- お種は寝衣に羽織で、肌薄の寒いこと夥しい、幾度と無く緊々<sup>ひし</sup>と襟を搔合せては、身顔の出るのを怵<sup>おそ</sup>へ〜てゐたが、 ㊦ (165)
- ビシビシ
- 恚<sup>い</sup>して犇々<sup>びし</sup>責付けられるのも辛いが、 ㊦ (63)
- ヒソヒソ
- 其が止むと又密々<sup>ひそ</sup>話になつて、 ㊦ 「其面影」 (1-315)
- ヒタ
- 直<sup>ひた</sup>と此方を凝視<sup>こちをみつ</sup>めてゐるのが、 ㊦ 「肖像画」 (2-189)
- ヒタヒタ
- 野川が緩々<sup>ひた</sup>と汀の草の葉を洗ひながら、 ㊦ 「小夜千鳥」 (291)
- ビククリ
- 「あら、最う其様に成るでせうか？」と吃驚<sup>びくくり</sup>して、 ㊦ 「其面影」 (1-366)
- ビッシャリ
- 「つい、是は失礼を。」と言ふより早く襖<sup>びつしやり</sup>を閉然、 ㊦ (313)
- ビッショリ
- 毎日父様が汗全滯<sup>びつしより</sup>になつて働くより、 ㊦ 「小夜千鳥」 (297)
- ビッシリ
- 此日頃犇<sup>びし</sup>りと胸に盈ちてゐた愁も次第に蒸発して、 ㊦ (90)
- ヒッソ
- 須臾にして風が吹龍<sup>ふきや</sup>めば、また四辺蕭然<sup>あたりひっそ</sup>となつて、 ㊦ 「浮雲」 (1-28)
- 寝間はいつまでも閑寂<sup>ひっそ</sup>として、 ㊦ (163)
- ヒッソリ
- 台所は急に火の消えたやうに閑寂<sup>ひっそり</sup>となる。 ㊦ 「平凡」 (1-618)
- 兄さんのお室は横の方の小窓も、縁側の障子も皆閉切られて、陰氣に寂然<sup>ひっそり</sup>として居る。 ㊦ 「うら庭」 (188)

- 一同は悄然として顔を上げるものとは一人も無い。 ㊦「薄衣」(125)
- お種は闌然と寐鎮つたまゝ、 ㊦(299)
- 彼処には未来といふものが無い、寂闌として何を見ても浮世の暇があいたやうなものばかりで…、 ㊦「肖像画」(2-234)
- ピッタリ
- 目と目が直たりと合ふ。 ㊦「平凡」(1-563)
- ヒヤヒヤ
- 涙が流れて、拭かずにあれば気味悪く冷々と頬を伝はる、 ㊦(68)
- ヒヤリ
- 紛ふ方なく、まざ〜と見える……と思ふと、胸が冷りとした、 ㊦「肖像画」(2-189)
- ビュー
- 颯と来る風に吹捲られながら、 ㊦(98)
- ビュービュー
- 鼻の頭が挽るやうな風が颯々吹いて、 ㊦(67)
- ヒョイ
- 無心に煙草を喫んで居た顔を躍然と擡げて、 ㊦「小夜千鳥」(291)
- 此語を聞くと齊しく葉山は躍然と首を挙げた。 ㊦(38)
- ヒョコヒョコ
- 「…男風だつて万更でもなし、一寸好い服装をしてあても、趨々彼奴を擧げて行く所を見ると、まあ大概の岡惚は帳消になりますよ。」 ㊦(250)
- ヒョッ
- 此人に聞いたら、偶然とボチの居処を知つてゐて、 ㊦「平凡」(1-577)
- ヒョックリ
- 屈んだ身体を躍然起して、 ㊦「いちごの実」(428)
- ヒョッコリ
- 暫く姿の見えなかつた元が突然出て来て、 ㊦(84)
- と言ふのを現に聞きながら柳之助は躍然と座を起つて、 ㊦(176)
- ヒラヒラ
- 折からの涼しい風、浴衣の袖が飄々と動くと共に、 ㊦「いちごの実」(426)
- ヒラリ
- 哲也の鼻の先で庇髪のリボンが飄と靡く。 ㊦「其面影」(1-359)
- 「畜生！」といふ帛を裂く如き絶叫と共に、翩と空に二尺指、小夜子の頬にピシリと中ると、呀と小夜子は目の下を抑へ、 ㊦「其面影」(1-385)
- と蝶の舞ふやうに飄然と身を翻して、 ㊦「平凡」(1-601)
- フ
- 増々酔が廻つて来て暈が怠んだ様に我知らず弗と又交睫む、 ㊦「新梅ごよみ」(397)
- 久らくすると小夜子が偶と面を擧げて、 ㊦「其面影」(1-366)
- 偶然した出来心から万引の罪を… ㊦「野心」(446)
- 中背の男は不図立止つて、 ㊦「浮雲」(1-5)
- フイ



- 柳之助は…ゐたが、之を聞くと齊しく飄然と起上る。 ㊤ (64)
- ブイ
- 柳之助が帰つて来る、食事を済す、飄然と二階へ昇る。 ㊤ (94)
- 憤とお玉は徳造が縄つて居る袖を払つた。 ㊤ 「小夜千鳥」(287)
- フサフサ
- 淡紅色縮緬の兵児帯を繚々と後結にして、 ㊤ (260)
- フッ
- 主は弗と目を開いて、 ㊤ (10)
- 葉山はしみゝ芸者の横顔を眺めてゐた目を突如と外して、 ㊤ (215)
- フックリ
- 撫肩のすらりと為た身長は却て自分よりも一二寸高いので、豊艶とした、然し何方かと云ふと細面の、皮膚の滑い上に色は抜ける程白く、 ㊤ 「四疊半」(252)
- 笑ふと目元に小皺の寄る、豊頬した如何にも愛嬌のある円顔で、 ㊤ 「平凡」(1-535)
- フツツリ
- 入学後一年余にして、余儀ない事情があつて、学資の仕送りが弗り絶えた。 ㊤ 「其面影」(1-330)
- ブツツリ
- 是で話が弗つり切れて、銘々思ふ所あるが如く、 ㊤ 「其面影」(1-362)
- ブツブツ
- 私が叱り付けてやつたら、小女は何だか沸々言つて出て行つた。 ㊤ 「平凡」(1-670)
- フラフラ
- 猶浮羅ゝ為ながら礼吉は… ㊤ 「花ちる夜」(236)
- ブリブリ
- 不機嫌な面をして憤々しながら。 ㊤ 「奇遇」(2-53)
- フラリ
- 彼は本意無さうに起つて、飄然と座敷へ出て、彼地此地と… ㊤ (284)
- ブラブラ
- 片手に余るほど有るのに、南天の実が悪く揺々して急ぐと落ちさうで、 ㊤ (72)
- 真砂町の通りを漫々来ると、 ㊤ 「其面影」(1-360)
- ブルブル
- ト文三は慄然と胴震をして唇を喰ひしめた儘暫く無言。 ㊤ 「浮雲」(1-26)
- フワリ
- 交際社会の浮りとした間へ入つて、 ㊤ 「肖像画」(2-192)
- ブン
- 芬と悪臭い香を先に立て、 ㊤ 「其面影」(1-508)
- 冷たい何かの香が紛とする風が颯と吹き入れて、 ㊤ 「肖像画」(2-192)
- ブンブン
- …鼻頭へ、床の梅か香が芬々と来る。 ㊤ (160)
- 憤々しながら晚餐を喫して… ㊤ 「浮雲」(1-114)
- ペタン

○ 母親は平坦と坐つて息継の莧を吃しながら、 ㊤ (89)

ベチャベチャ

○ 「…余計な事を喋々お饒舌しやがつたからなんだ。」 ㊤ 「花ちる夜」 (219)

ヘドモド

○ 何と答へて好いか判らぬので、狼狽してゐる中に、 ㊤ 「奇遇」 (2-27)

○ 柳之助は周章狼狽して、膝を正すやら、 ㊤ (51)

ベラベラ

○ 喋々と其事を饒舌るを防ぐ外は… ㊤ 「其面影」 (1-297)

ポーポー

○ 茫々と広い明るい空のやうな処へ… ㊤ 「平凡」 (1-590)

○ 毛髪は蓬々と雲脂に汚れて、 ㊤ 「三重櫛」 (60)

ボカン

○ 独り放心として… ㊤ 「其面影」 (1-493)

ボタボタ

○ 柳之助は行くよりラムプを乞と明くして、坐ると写真を睨と見入つてゐたが、其目は瞬くのを忘れたやうに、姑く睜つてゐる間に、机掛の花唐草の上に滴々と露を零した。 ㊤ (237)

ボタリボタリ

○ 柳之助は…俯いて、滴々と涙を落す。 ㊤ (8)

ホッ

○ 哮と一息したと云ふ躰で…、 ㊤ (288)

○ まづは怪い者でもなかつたか、とお種は嘖と息を… ㊤ (161)

○ 咈と太息を漏らす。 ㊤ 「其面影」 (1-452)

ボッ

○ 笑の溢れさうな甘たるい目で疾から凝と面を視られてゐたので、狼狽て俯くと、もう微と紅くなる。 ㊤ 「其面影」 (1-419)

○ 四辺が濛と暗くなると、 ㊤ 「平凡」 (1-574)

○ 眼の下の模糊と蒼くなつた所まで。 ㊤ 「肖像画」 (2-211)

ボッチャリ

○ …冏者とや、廿歳ばかりの豊艶したると、 ㊤ 「青簾」 (267)

ボットリ

○ 今一人は落雪とした妙齡の束髪頭、 ㊤ 「浮雲」 (1-94)

ボツボツ

○ 此暇に徐々と支度を為るも可からう、 ㊤ (146)

ボツン

○ 元が一人で孑然としてゐる平生よりは、 ㊤ (79)

ホロホロ

○ 老婢は忽ち点々と涙を零した。 ㊤ (8)

○ …母親の目には零れさうに涙が一杯になつてゐる。柳之助は怵情無く前から滴々と落してゐるので。 ㊤ (84)

ボン

- 別に読まうでもなく惘然として見てみると、㊦ (46)
- 思窮めてばかりゐる証は、始終惘然としてゐる。㊦ (135)

ボン

- ト一思に愕然と皿の縁へ打着ける。㊦ (23)

ホンノリ

- …退屈凌ぎに不断は用ひぬ酒を、飲むとも無く嘗めて見る杯も、何時か知らず数を重ねたと  
覚しく、微醺となるに連れ、㊦「新梅ごよみ」(395)

ボンヤリ

- 葉山は茫然酒を飲んでゐる。㊦ (25)
- 又独りで孑然と内に居るのは、㊦ (142)
- 漠然とした挨拶ばかりで、㊦ (186)
- 何と云ふ事は無しに惘然胸してゐる。㊦ (8)
- …と言つたまゝ惘然と灯を覗めてゐたが、㊦ (276)
- …影法師が朦朧と映つてゐる。㊦「其面影」(1-417)
- 今まで見えた其処の高い碑さへ模糊となるまでに暮れて来たので、㊦ (105)
- 二階はラムプが陰々点いてゐて、㊦ (166)
- 姉のお類も決して遲鈍の方ではなかつた。㊦ (99)

マゴマゴ

- …何とか曖昧なこと言つて、狼狽するに違無い。㊦ (127)

マザマザ

- 其形は減したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い可愛い妻の類子が顚然と生きてゐるのである。㊦ (5)

マジマジ

- 火事でも無ければ可いがなどゝ、案じ過して耿耿してゐると、㊦ (159)
- 柳之助は墨々してゐる。㊦ (185)

マンジリ

- もう帰るか、もう帰るか、と待つ間独兀然としてゐると、㊦ (90)

ムクムク

- 柳之助の夜着が蠢々と動いたので、㊦ (252)

ムザムザ

- それをこの辺の菊のやうに斯う無残々と作られては、㊦「浮雲」(1-91)

ムジャクジャ

- 猶々乱れる胸の紛蕪、㊦「新梅ごよみ」(393)
- 考へれば考へるほど気が紛蕪して来て、㊦ (84)
- 思切つてはゐないが、思切らぬ訳にもゆかぬから、そこで悶々する。㊦「浮雲」(1-102)
- 憤々として多時は落着くことが出来なかつた。㊦「片恋」(2-102)

ムズ

- 節くれ立つた大な腕がヌツと出て、正体なく寝入つてゐる所を無手と引摺み、㊦「平凡」(1-556)

ムズムズ



- 言ひたい口の蠕々するのを頻に撫廻して、 ㊦ (247)
- ムッ
- すると「頼さん」の艶然とした面影が胸に浮むのである。 ㊦ (18)
- 「売れんのか。」と柳之助も怫然とする。 ㊦ (71)
- 下賤むやうなる口調に問掛けられ、些し憤然とせしが、 ㊦ 「濁りそめ」 (50)
- ムック
- 蹶然と起上る。 ㊦ 「浮雲」 (1-29)
- 倏忽勃然と跳起きて、 ㊦ 「浮雲」 (1-111)
- ムックリ
- まづ朝勃然起る、弁当を背負はせて学校へ出して遣る、 ㊦ 「浮雲」 (1-10)
- ムツリ
- 柳之助は怫然として返事もせず、 ㊦ (60)
- また父のやうな、陰気な、沈黙した者の手に育つては、 ㊦ 「片恋」 (2-114)
- 彼木訥漢の急に気の強くなつた面の憎さ。 ㊦ (219)
- ムラムラ
- 持前の肝癪が勃然と発り、 ㊦ 「其面影」 (1-449)
- メキメキ
- 然う着々肥立つて耐るものか。 ㊦ (197)
- モジモジ
- 「私は最う帰らう」、と口には言ひながら、逡巡してゐたが、 ㊦ 「其面影」 (1-403)
- 「は、それだけです」、と遲疑して、 ㊦ 「其面影」 (1-395)
- 必然忸怩して碌に口も利けはしない、 ㊦ (127)
- もう呼ばうか、さあ起たうか、と踟躕してゐる間に、 ㊦ (161)
- モジャモジャ
- 茸々と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕が… ㊦ 「平凡」 (1-558)
- モダクダ
- …例の華かな高笑で今までの葛藤を笑ひ消して仕舞はうと… ㊦ 「浮雲」 (1-241)
- 唯幸福を得たい、幸福に飽きたいで、悶々としたのである。 ㊦ 「片恋」 (2-132)
- モダモダ
- 柳之助は到底空腹を癒しかねて悶々してゐると、 ㊦ (209)
- モヤモヤ
- 模糊と湯気の立籠つた湯の中の事とて、 ㊦ 「花ちる夜」 (231)
- 朦々と村雲の様な濃い煙が湧出して、 ㊦ 「小夜千鳥」 (279)
- 雨は猶濛々と降罩めて、 ㊦ 「新梅ごよみ」 (389)
- ヤキモキ
- 立入り過ぎな事もならず、鬱勃思ふばかりで、 ㊦ (69)
- 自分一人焦慮するのが口惜しくなつて、 ㊦ 「其面影」 (1-334)
- ヤッサモッサ
- 人々の心を痛める此世の紛擾には縁の遠い風である。 ㊦ 「肖像画」 (2-233)
- ユックリ

- 挨拶の毎も緩漫<sup>ゆつくり</sup>としてゐるお種は、 ㊦ (45)
- 「まあ御寛<sup>ゆづくり</sup>なさいまし。」 ㊦ (54)
- 「其ぢやア、悠々<sup>ゆづくり</sup>遊んで行つても構はないんだらうね。」 ㊦ 「薄衣」 (81)
- まあ悠然と、好機会を見てからの事にして、 ㊦ 「花ちる夜」 (223)
- 「…、悠寛<sup>ゆづくり</sup>と思残の無い様に談話を為てお呉れな。」 ㊦ 「四疊半」 (252)

#### ユッタリ

- 着てゐる亜細亜風の衣服の寛濶<sup>ゆつたり</sup>した襷袢<sup>ひだ</sup>までが、 ㊦ 「肖像画」 (2-243)
- 今夜も濶大<sup>ゆつたり</sup>した白い衣服を着てゐるが、 ㊦ 「奇遇」 (2-29)
- 曠<sup>はれ</sup>やかな、悠然<sup>ゆつたり</sup>した、見れば心持の快くなる面相で、 ㊦ 「肖像画」 (2-233)

#### ユラユラ

- 聴て巡査の角灯の光が揺々<sup>ゆら</sup>と此方へ近づいて来るのを見ると、 ㊦ 「野心」 (500)

#### ユラリユラリ

- 緩り<sup>ゆら</sup>と歩きながら、すらりとした体を少し屈めて、 ㊦ 「奇遇」 (2-72)

#### ユルユル

- 「…。私は悠々<sup>ゆる</sup>鎌倉で養生致しますから。」 ㊦ 「かたわれ月」 (41)
- 邸の方角へ向いて、緩々<sup>ゆる</sup>行くと、聴て… ㊦ 「奇遇」 (2-46)

#### ユルリ

- 「御悠々<sup>ごゆるり</sup>、行つて被入<sup>こ</sup>いまし。」 ㊦ 「新梅ごよみ」 (368)
- 早く茶の間へ行つて、暢然<sup>ゆるり</sup>と相対になつて落着きたいので、 ㊦ (287)

#### ヨタヨタ

- 五兵衛爺<sup>ぢやう</sup>は相変らず疲曳<sup>よた</sup>と野へ出て行くが、 ㊦ 「小夜千鳥」 (300)

#### ヨボヨボ

- 如何したつて疲曳<sup>よぼ</sup>の老夫とより想はれない、 ㊦ (262)

#### ヨロヨロ

- 三人は蹣跚<sup>よろ</sup>しながら涼しい松影橋を渡つた。 ㊦ 「小夜千鳥」 (295)
- 二三度彼方此方で小突かれて、蹣跚<sup>よろ</sup>として、危ふかつたのを…、 ㊦ 「平凡」 (1-572)

#### ワクワク

- 段々胸が悸々<sup>わく</sup>し出した様子で、 ㊦ 「あひどき」 (2-15)

#### ワナワナ

- ト縋つた手に凝と力が入ると、戦々<sup>わな</sup>と顫ひ出す。 ㊦ 「其面影」 (1-411)

〔注〕 引用文において、「／」は、原文では行かえにしてあることを示す。「…」は、引用者が、便宜上省略したことを示す。「——」、「……」、「!」、「?」は、原文のとおりである。

漢字の字体については、あまり厳密にはせんさくしなかった。と、いって、決しておろそかにしたわけではなく、主として、諸橋氏の『大漢和辞典』、及び、その他の漢和辞典について当たった結果、原文に使用してある文字の字体と、辞典に掲げてある文字と比べて、点画の方向や組み立ての上で、わずかの違いがあっても、その字と認めて差し支えないと思ったものは、その違いにこだわらないことにした。(このような違いは、『大漢和辞典』自体においても、見受けられる場合がある。)

したがって、原文では、いわゆる俗字や、当時の通用字体が使っている場合でも、あえて、それにとられず、字典体によった。

「とつかは」という語は、近ごろは、ほとんど使われないようである。しかし、明治時代の作品には、

ここに取り扱ったもの以外の作品にも、ときに、見掛けることのある語である。この語は、『和英語林集成』の各版にあるが、『言海・日本大辞書・日本大辞林・帝国大辞典・日本新辞林・ことばの泉』等にはなく、『改修 言泉』には、品詞を「貌詞」として採録してある。また、『辞林』及び、その改訂をした諸版には見えないが、『大辞典』、『辞苑』（その後の各改訂をした版、現行の第三版にも。）、その他近年刊行の諸辞典には採録されている。

試みに、新旧各種の国語辞典（『和英語林集成』の初版・再版・三版を含む。）31種について、「いらいら・うっとり・きらきら・ぐずぐず・こつこつ・さっぱり・さらさら・そろそろ・とつかわ・にこにこ・にっこり・ぼんやり・ゆっくり・よろよろ」の14語について、その表記を当たってみたところ、

「いらいら」には、ほとんど辞典で、「苛苛」、若しくは、「刺刺」、又は、その両方を当てている。「うっとり」は、仮名書きのものが多く「恍惚」を当てているもの、又は、これを類語として掲げているものもかなりある。

「きらきら」は、「煌煌」を当てているものが多く、仮名書きのものは、最近のものだけのようである。

「ぐずぐず」は、「愚図愚図」を当てているもの、当て字と断って掲げているものが多く、近年刊行のものにも掲げているものもかなりある。

「こつこつ」は語義によって、多いものでは、7項目を立て、それぞれにいろいろの漢字を当てている。うち、擬音語の場合は、そのほとんどが仮名書きである。

「さっぱり」は、ほとんど仮名書きであるが、「爽」（2種）、「清爽」・「全然」（各1種）があった。「さらさら」は、意味にかかわりなく、ほとんど仮名書きであるが、擬態語の場合に「流暢」を当てているものが1種ある。

「そろそろ」は、「徐徐」を当てているものが半数を超えるが、他は仮名書きである。意味によって、仮名書き・漢字書きを使い分けているものが1種ある。なお、「徐徐」は『書言字考節用集』にも見える。

「とつかわ」は、〔注〕で述べたとおりである。

「にこにこ」は、「莞爾」を当てているものが半数足らずある。「にこにこ」は、各種節用集にも「莞爾」又は、「𦵏然」などとして採録してある。

「にっこり」は、「にこにこ」とほぼ同様、「莞爾」とするものが半数足らずであるが、両者の表記法は必ずしも一致していない。すなわち、一方に漢字書きを掲げ、他を仮名書きとしてあるものもある。この語の元の形の「にっこ」は、やはり、各種節用集に採録してある。「莞爾」とするものが大部分であるが、なかには、「和」としているものもある。

「ぼんやり」は、「漠然・朦朧・惘然・茫然」などのうち、一つ、又は、二つを当てているものがあるが、多くは古い刊年の辞典であり、大正以降のものは、仮名書きにしているものが多い。

「ゆっくり」は、「緩」を当てるものが相当数に上る。

「よろよろ」は、「蹢躅・踟躕」のどちらか、又は、双方を当てているものが、最近のものを除いてはほとんどである。この語も、節用集によってその漢字書きを、蹢躅・逡迤・倥偬などとして載っている。

（お断り）これを資料として、種々考察すべきこと、述べたいことは多々あるが、今回は、紙幅の都合ですべて割愛した。

〔昭和60.11.17 稿了〕